●マーガレット・クレイブン著

「ふくろうが私の名を呼んだ」

千田明夫

バンクーバーから船でジョージア水道を北上し、複雑に絡み合った島々の間を縫ってクイーン・シャーロット水道に出る。アラート湾の辺りから針路を東へ向けて進むと、ギルフォード島があり、その島をやや北へ行くと船はキングカムの入江に達する。そして、ここから川をさかのぼって行ったところに、この小説の舞台となるキングカム村がある。

一九六五年に、アメリカの女流ジャーナリスト兼短編小説家マーガレット・クレイブン（当時六十四才）は、前述のルートを通ってキングカム村を訪ね、数週間そこに滞在し、原住民クワキュトルの実態を調べ、その記録に小説的色合いを加えて一冊の美しく感動的な作品を書き上げた。

この本の題名は、「ふくろうが死が間近い者の名を呼ぶ」という、インディアンたちに古くから伝えられている伝説に基づいたものであるが、小説の中では、不治の病いに冒されて命が三年ともたないマーク・ブライアンという若い牧師が登場する。彼は自分の病気について何も知らされていないが、英国国教会の主教によってキングカム村へ派遣され、インディアンたちと生活をともにしながら生きることの意味を学ぶことになる。

キングカム村は、インディアンの文化が他の地域と比べて最も質が高いといわれ、昔から語り伝えられ、受け継がれてきた神話や伝説、生活習慣がいろいろ残っている。著者はそのひとつひとつを小説の中に効果的に挿入している。墓の樹木（棺をのせた樹木）、トーテム、狩猟やサケ釣りの伝統、踊りと仮面、キャンドル・フィッシュやハマツサの伝説など、――それぞれの由来や意義がインディアンたちの口を通して静かに、誇り高く語られる。

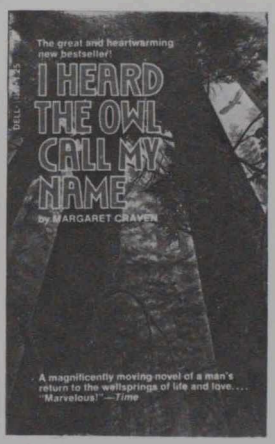
しかし、こうしたインディアンたちの生活習慣や伝統も、時代とともに大きく変わろうとしている。例えば、ポットラッチ（インディアンの冬祭り）は、祭りで物品を他人に贈与して名声を博し、特権を取得する原理を取り入れているものだが、これはインディアン社会の根強い世襲制とは全く対照的なものである。政府は、すべての財産を人に贈るようなことは禁じてしまったので、インディアンたちは人に物をあげる伝統が消えていくのを嘆く。

古い生活様式が次々に姿を消していく中で、若者たちの生き方も内と外の二つの世界に引き裂かれてしまう。親は学校から帰郷した子どもたちが、村での生活を尊重しなくなることを恐れる。小説の中では、ゴートンという少年が、都会で白人の学校に通っているうちに、白人の生活様式に魅せられて村を離れることを決意する場面がある。ここで注目されるのは、彼の祖父がゴートンのために親族を集めて会食し、その席で意見をきくという習慣である。

年とともに忘れ去られていく村の生活、それを必死に守ろうとする老人たちの孤独な闘い、それは同時に、マーク自身の孤独な闘いでもある。そして、マークはそれに打ち克つことこそ、自分の孤独な生活をいやしてくれるものである、と悟る。

産卵のために川をさかのぼってやってくるサケは、インディアンたちにとって生き方の指標であり、尊敬すべき存在である。

「……泳ぐ者（インディアンのサケに対する敬称）の一生は、勇気と冒険の連続だ。それが次第に高まっていって最後のクライマックスを迎える。泳ぐ者が死ぬときは、自分がこの世につくられた目的のために自分を完全に使い果したときだ。これは悲しみなんかではない、勝利なんだ。」



マークはサケによって教示された人生の意味を納得する。彼は孤独から解放され、心に安らぎを覚える。そして、サケのように、永遠に変わることのない自然と同化し、自然の一部になろうとする。やがて、マークは森の中でふくろうが彼の名を呼ぶのを聞いて、彼の身に起ころうとしていることを理解する。

わずか百数十ページ足らずの本であるが、最後まで読者の心をひきつける。事実とイマジネーションを混ぜ合わせ、読者に切れ目を感じさせない筆致は実にみごとである。特に、キングカム村の自然描写は、ジャーナリストだけあって実に細かく、まるで自分がその中にいるような錯覚さえいだく。

鳥も魚も村も人も大自然の中に共感をもって包み込まれているが、読者はそこに住んでいる誇り高きインディアンたちがいつも深い悲しみをたたえ、物思いにふけっているのを知る。にもかかわらず、どのインディアンにも暗い絶望感が感じられないのは不思議だ。この小説がセンチメンタルだといわれる所以かも知れない。

著者がアメリカ人であることもこの小説の意義を高める。なぜなら、インディアンのかかえる問題は、いかなる国を問わず、自分たちの問題でもあることを示唆するからである。滅びつつあるのは、近代文明の危機の中に生きているわれわれであり、永遠に変わることのない自然と同化し、その自然から勇気と忍耐を学ぶインディアンたちにこそ生の不滅を見出すことを、著者は読者に教えているように思える。

なお、この本は今から十年ほど前、トロントの出版社が四万八千部も売ってカナダでは大成功だった。一九七四年、今度はアメリカでベストセラーになり（一九七四年二月四日付朝日新聞）、CBSテレビでも紹介されて好評だったという。日本語訳として、『ふくろうが私の名を呼ぶ』（片岡義男訳　角川書店発行）があることを付記しておく。

（桐朋学園短大講師）